

貝になった男

直江津捕虜収容所事件

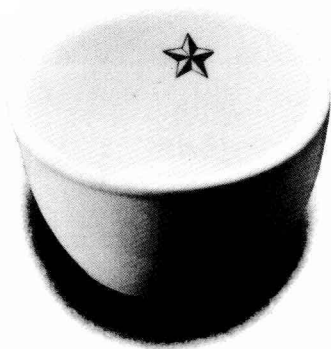
上坂冬子

文藝春秋

貝になった男

直江津捕虜収容所事件

上坂冬子



文藝春秋

著者略歴

1930 (昭和5) 年東京に生まれる。OL生活13年を経て独立。在社中より上坂冬子のペンネームで執筆活動を始め「職場の群像」で一躍注目を浴びる。著書は「特赦—東京ローズの虚像と実像」「生体解剖—九州大学医学部事件」「巣鴨プリズン13号鉄扉」「慶州ナザレ園—忘れられた日本人妻たち」「遺された妻—横浜裁判BC級戦犯秘録」「男装の麗人・川島芳子伝」「おばあちゃんのユタ 日 報」等多数。

貝になった男

——直江津捕虜収容所事件——

1986年8月15日 第1刷

1986年10月1日 第3刷

著 者 上坂冬子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 東京03(265)1211(代)

定 価 950円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Fuyuko Kamisaka 1986 Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はお取り替えいたします

ISBN4-16-340830-4

貝になった男／目次

プロローグ

足をもがれた少女

遺族たち

最後の民謡

河原の枯れすすき

チリ紙のてるてる坊主

三十五年目の便り

戦犯裁判

証言台にて

七

六

五

七

四

五

六

七

八

捕虜をかばった人

一九

所長の記録

二〇

戦争後遺症

二一

オーストラリアの捕虜たち

二二

軍事郵便のプロポーズ

二三

貝になった男

二四

あとがき

二五

装幀 坂田 政則
カバー写真 大海 秀典

貝になった男

——直江津捕虜収容所事件——

プロローグ

汽車弁の夕食をすませると、すでに八時をまわっている。直江津に着いて駅の真正面にある宿に駆け込み、一風呂浴びたら今夜はすぐ寝ようと私は考えた。重いテーマをかかえた旅のせいかわりになく疲れて気持ち落ち着かない。時は昭和五十五年の、たしか晩春であった。上越新幹線はまだ開通していない。夕方の汽車で上野を発って高崎を過ぎた頃、美しく空を染めて日が沈んだのを覚えている。紫と赤の絵の具をまぜ、ため息を吹っ掛けて曇らせたようなその色を見ながら、私は不安と沈滞と、そして期待をまぜあわせた複雑な思いで汽車に揺られていた。そのとき、前方の座席から振り返るようにして私を見ている女性に気づいた。年は私と同じくらいだろうか。疲れていたせいもあって私はことさらに目をそらし、やがてとうとうと軽い眠りについたのであった。

目が覚めたのと直江津に着いたのが、ほとんど同時である。終点なので人々はゆつくりと席を立ったが、生来せっかちな私は一人あわただしく戸口にむかった。すると

「あとう」

と私を呼びとめた人がある。振りむくと、さきほどから私を見ていた女性で

「上坂冬子さんですね。直江津にはお仕事でいらっしやったのですか」

と問い掛けた言葉に少し訛りがあつた。地元の人にちがいない。とっさに私は、この年代なら、いまから調べようとしている捕虜収容所を知っているはずだ、と心ときめかせたのである。

戦時中、日本の各地に捕虜収容所が設置されていた。新潟県下では、新潟、青海、直江津などにあつたが、私が特別な関心を抱いたのは直江津である。直江津捕虜収容所は東京の管轄で、正式には東京捕虜収容所第四分所という。

なぜ私が直江津に強い関心を持ったかという点、戦後、ここで働いていた日本人の中から、八人ものが戦争犯罪人として絞首刑に処されたからだ。国内の捕虜収容所としては、処刑された人の数が最も多い。いったい何があつたというのだろう。さらにもうひとつ、八人の部下が絞首刑になったというのに収容所長は終身刑で、十二年の獄中生活を送つたあと無事に家族のもとに戻っている。陸軍中尉（ポツダム宣言受諾後に大尉）だつた所長はどんな人で、なぜ生き長らえることができたのか。

いまさら究明したところで事態は変わるわけでなし、誰もが触れたくないからこそ、そつと戦

後史の片隅に埋めるようにしてきた話を、今頃になって掘りおこすことへのためらいはあったが、私には戦争が引きおこした明暗に理屈ぬきの執着がある。とりあえず現地にいつてみよう、と謎解きの旅に出かけてきたのだ。私は私と同世代に見えるというだけの親密感から列車の中のゆきずりの彼女に、だしぬけに問いかけたのであった。

「直江津に捕虜収容所があったのを、ご存じですか」

初対面にもかかわらず、彼女は人なつこく多弁で

「捕虜収容所のことなら、よく覚えてます。わたしは女子挺身隊として、毎朝、古城橋^{よるしろ}を渡って工場に通ってましたもの。橋の上から収容所が丸見えでしたけど、先生から絶対に収容所のほうを見るな、反対側を見て歩けと言われてました。女学生と捕虜とが恋愛でもはじめたら、えらいことだと思われたんでしょう」

一気にこう語ったあと、彼女は別れぎわに私の顔を見据えるようにして付け加えたのである。

「収容所に関係したことを調べにいらっしゃったのなら、私の友達のみえさんに会って話をさるといいですて。戦争のあとで苦勞された人ですて」

語尾に「て」をつけるのは方言なのだろう。たった一文字で、いかにも物柔らかい印象になる。みえさんはどこに住み、どんな苦勞をした人なのかと、踏み込んで聞きたいと思いつつも、私はあど曖昧に頷いて人の流れに身をまかせて改札口に向かった。駅前のいかや旅館に心奪われていたせいである。

もう何年も前のことだが、信越化学の女子社員のための講演会に招かれて直江津に行ったことがある。そのときの宿が駅前の「いかや」という木造の品のいい旅館だったことを私は鮮明に覚えていた。手入れの行き届いた庭の木立や、磨き上げられた長い廊下などを思い出しつつ電話で問い合わせたところ、どうやら宿は健在で私はほんとに救われる思いであった。もしこの旅がさしたる収穫もなく終わつたとしても、あの宿で旅情を楽しむことができれば、それはそれでいいではないかと、自分で自分を引き立てるようにして私は家を出てきたのである。

いかや旅館は以前泊まつたときのままの姿であった。恐らく明治の終わり頃から、その姿を変えずにきているのではないか。正面玄関の右手の、六角形の西洋館の塔がたしか応接ロビーだったと記憶を蘇らせながら、私は列車の中で聞いた「ミエさん」の名などものはや念頭になく、宿の玄関に駆け込んだのであった。

通された十畳の座敷に香が焚いてある。香炉は李朝だろう。畳一枚ぶんほどの床の間に茶花が活けてある。

「大旦那さまは九十歳ですけどお達者で、いまでも階下の茶室で教えておられます」

部屋付きのベテラン女中さんの愛想のよい語り口に心ほぐれる思いを味わいながら、私はその大旦那さまに会えば謎解きの手がかりが掴めるかも知れないとひそかに胸算用した。さしあたって、明日は一日観光に当てるくらい之余裕をもって、慌てずに時期を待とう。女中さんは私の心をみすかしたかのように、ここで観光名所として柏崎の「ちごのや」を挙げた。

「痴娼の家」と書いて、ちごのやとよむ。地元の篤志家岩下庄司氏が収集した三万点ほどの人形や郷土玩具を並べた展示館で、この命名は児童文学者巖谷小波氏によるという（現在は展示内容が変わり、痴娼の家ではない）。人形にさして関心はないけれど、直江津―柏崎間なら取材のための足ならしには丁度よい距離である。明日、遅い朝飯を済ませて出かけたいからタクシーを頼んでおいてほしいと告げて、私はころがるように床についた。

「日本玩具館・痴娼の家」は米山大橋を渡った小高い丘の上にある。二階建の館内に一步踏み入れて、私はしばし息を呑む思いであった。展示三万点という数もさることながら、全国各地の郷土人形をくまなく集めたその執念に圧倒されたのである。東京からは出初式の「め組」の文字入りの水鉄砲などが選ばれていた。北海道旭川からは、こけしの名工小椋米吉氏の「米吉こけし」、岩手からは、籠の中の赤ん坊に乳を含ませようとして胸をはだけた母親の姿をかたちどった「えじこ」、四国の高知からは坊さんと簪かんざしをつけた芸者が相合傘に身を寄せた人形、九州長崎からは古賀人形というように、文字通り北から南まで各地に散在する有名無名の玩具や人形が、ガラスケースのなかで愛らしい表情をみせている。

展示品は日本のみならず、東南アジアの国々にも及んでいたが、やがて私は片隅のケースの中に青い目の人形があるのに気づいた。

昭和二年にアメリカの世界親善協会から、使節として一万数千体の人形が日本の小学校に送ら

れてきたことはよく知られている。展示されているのは、その中の二体であった。頭巾をかぶった軽装のと、毛皮つきのコートを着たのとを揃えたのは、贈り物に季節感を盛り込むためであろうか。ルースにミルドレッドと、それぞれの名を記した当時のヴィザも添えてある。日米ともにゆとりのある、よき時代を髣髴しながら私は歩を進めていたが、次の瞬間、思いがけない衝撃に身を硬直させたのであった。青い目の人形に添えて、一通の毛筆の手紙が展示してある。

「拝啓先程御申越相成候アメリカの俘虜二名差上げ候間 収容被下度 御依頼申上げ候

岩下様 二月十八日

角張信隆」

二体の人形を捕虜にたとえてあるのだ。手紙の解説として

「人形愛護の鬼・岩下庄司と、豪胆鉄腸の大校長・角張信隆の間に結ばれた男と男の命がけの秘密盟約。それが日米親善・人形使節のいのちを救った証である」

と記してあった。

人形愛護の鬼・岩下庄司氏は柏崎市内で明治初年からの文具店を継ぐ人であった。痴娯の家を埋めつくしてなお余りあるほどの玩具や人形はすべて岩下氏が足で集めたものである。手紙に年号は記してなかったが、直江津捕虜収容所が軌道にのった頃のものにちがいないと私は思った。日米親善使節が送られてきて、わずか十数年しかたっていないというのに国と国とが敵対して、人形は身のおきどころのない時代になっていたのである。

人形収集家の岩下庄司氏にとって、何はともあれ戦争は人形の大敵であった。岩下氏としては、

各学校に配られた罪のない青い目の人形の身の上を案じつづけた末に、角張校長の許に出向いて自らその保管を名乗り出たものと思われる。

角張信隆氏は中頸城郡黒川村村長の息で、高田師範を卒業して以来もっぱら地元の教育分野で活躍し、県の首席視学を経て柏崎国民学校、実業高等女学校などの校長を歴任した。日中戦争下では文部省派遣全国小学校長団に加わって満洲・支那（現中国）を視察し、『新潟県人名辞書』（昭和十六年刊）によれば「頭脳明晰豪放磊落辣腕を有し、軀幹長大……」とある。すでに両氏とも故人とならねたいま、二人の間でどんな会話が交わされたか知る由もないが、角張校長としては立場上、人形をあわれんだり岩下氏の配慮をねぎらったりすることなど口にできない時代であった。だが、岩下氏の熱意にほだされるまでもなく、角張校長にはそれなりの理性があったものと察せられる。手紙の書き出しに「先程」とあるところから、文案を思いついたのは岩下氏が帰ってまもなくのことらしい。後を追うようにして二体の人形と「捕虜引き渡し」の手紙とが岩下家に届いた。受け取った岩下氏のにやりとした表情が目につく。岩下氏は明治二十二年生まれだから当時五十四歳か。角張校長は明治二十四年生まれ、日本海の寒風に鍛えられた人々が戦時下に発揮した理性と友情であった。

それにしても、青い目の人形を捕虜になぞらえたのはうまい思いつきである。何事もなければ、とっさの機転で捕虜収容所が思い浮かぶことはなかるうから、小学校長が人形収集家の蔵を捕虜収容所になぞらえて敵国アメリカの人形を贈ったのは、直江津に捕虜収容所ができて軌道にのっ

昭和十八年頃のことであろうと私は想像したのだが、この想像を裏付けるかのように人形の展示ケースには一枚の古新聞が貼ってあった。

昭和十八年二月十九日付毎日新聞の夕刊で「青い眼をした人形、憎い敵だ許さんぞ」と見出しがついている。青森県鯀ヶ沢発として、「約十五年前、日米親善のふれこみで米国からわが国の各小学校へ一体ずつ寄贈になった『青い眼をした眠り人形』は、今にして思えば恐ろしい仮面の親善使節であった」という書き出しで、西津軽郡教育会でこの人形の処置について検討した経緯が述べてあるのだ。同校で開催された中堅訓導錬成会で、臨席の教学課長もこれは青森県のみならず全国規模の大問題であると述べて事の重大を認めたため、鯀ヶ沢国民学校では早速初等科五年以上特修科までの児童に「人形の渡日経路だけを説明して」その処置についてアンケートをとったところ、「決戦下日本の観念が童心にも根強く織込まれ」ているのが分かったとある。調査結果は次の通りであった。

破壊

八十九名

焼いてしまえ

百三十三名

送り返せ

四十四名

海へ捨てろ

三十三名

白旗を肩にかけて飾っておく

五名

米国のスパイと思って気をつけよ

一名